

JAPAN GET-ACQUAINTED PROGRAM

NEWSLETTER NO. 2

November, 1961.

Editor
Hachiro Kubota

その後は御元気で、おすべしの二こと存じます。私は先回のニューズ・

レター発送後、アダムスキのオミ番目の著書『Flying Saucers

』の翻訳にとりかかりましてこの仕事に没頭しておりまし

たが、実の二三種々の事情のためにUFO研究には、なかなか意欲を失

かけたような次第で、翻訳の仕事も遅々としてはかどらないままに、雑

務に追われて明け暮れしておりましたところ、最近、京都でアダムスキ

の親友である米国の実業家、ハンズン氏夫妻に会って詳細な情報と温かい

激励をたまわり、また奈良で某氏から心あたたまるもてなれど激励の

お言葉をいたなまきまして、またもや生気をとりもどしてこのニューズ・

レターの作製にとりかかった次第であります。人間の善意ほど有難いも

のではないと思ひますが、少数の方々から寄せられる激励のお言葉こそ私

にとって何物にも代え難い貴重なエネルギー源であると云えます。弱音

を吐く私に「久保田よ、元氣を出せ!!」とアダムスキは叱咤の声を送っ

てよこしました。身近かな皆探からもときには「どつした、レッ、かり

せむ」と一言ハガキで書き送って下されば、私の喜びはこれにすぎるもの

はありませぬ。

さて、アダムスキのオミ番はその書名からして田舎ごとの訛りを述べた

ものように思われるかもしれませんが、内容は必ずしもそうではなく、

これは『同業記』の続編ともいふべきもので、『同業記』で判然とした

かった部分をかなり詳述しています。疑問の点は二の書によつておわか

りた水解するでしょう。原書の出発社は『同業記』の場合と同様、ニユー

ヨークのアブラード・シューマン社です。全部で百九十頁のうち、ちよ

うと半分目にあたるオミ一部オミ九章までが翻訳済でありますので、その分

の概略を二二でお伝え致します。原書全部の概略(というよりも全訳を)

お伝えしたいのは山々ですが、ガリ版を切る仕事はとても疲れますし、

オミ一、翻訳してこそ精読したという二ことになりまので、後半はいずれ

も在り次第にお伝え致しますから御諒承下さい。

目次は次の通りです。

はしがき — 著者

序 文 — C・A・ハニー

オミ一部

オミ一章 なぜ宇宙人はまたか

オミ二章 二の太陽系内の宇宙活動

オミ三章 宇宙船と重力

オミ四章 最近の科学の発達

オミ五章 二の太陽系内の変化

オミ六章 砂漠の足跡

オミ七章 懐疑論者にたいする回答

オミ八章 テマにたいする回答

オミ九章 私は宇宙人から何を学んだか

オミ十章 聖書とUFO

オミ十一章 抽象論、心靈学、宗教

オミ十二章 世界講演旅行

オミ十三章 アメリカからニュージールランドへ

オミ十四章 瀋州

オミ十五章 ダーウィンからイングリランドへ

第四章 オランダ女王との会見

第五章 フェーリッヒ事件

第六章 旅行の結末

オ三郎

オ一章 悪魔すなわち時の人

オ二章 結語

以上

オ一部

『オ二章 なぜ宇宙人は来たか』

(註) この章の最大のポイント、戦後急速に円盤目撃現象が発生してきた理由が先づ冒頭に述べられていることである。

◎ 一九四六年十月に米国が月に向けて電波を放射したところ、それが空向にはね返って近隣の遊星の方向へと回りなり、遊星人はこれが地球の電波信号であるにちがいないと解して、調査のために急速多数の円盤を地球へ派遣した。これが右の理由である。当然彼らは放射地点に集中したため、米国が最も多くの目撃現象をもつ国となった。

◎ 進化した遊星人といえども誤差をおかすことはある。円盤のなかには地球の磁場やその他のコンディションに不馴れなものもあり、そのために墜落事故を生じるものもあった。この事故についてはフランク・スカーリーがその著書の空飛ぶ円盤の真相の中に詳細に述べている。スカーリーのこの著書は多数の円盤書の中から最良を採った少数の書の一つであり、貴重なものであるが、嘲笑と罵詈雑言のもとに葬り去られた。各国では多数のコンタクトや目撃例が提出している。(註) 珍しい実例が少しばかりこの章で紹介してあります。その後円盤は地球が二つむりつつある自然の過期的な変化を観察しつつある。

◎ 地球の数学上の概念は誤りである。宇宙人は「 $1+1=6$ 」という自然の法則を応用している。すなわち「3」は生み出された子供(結果)であり、これには両親の要素「2」が含まれている。地球でも古代にはこの法則が知られていたが、いつのまにか「0」の概念が導入されて誤まった数学が発展した。宇宙人の数学は「1」から「9」まで進み、「10」はなくてさらに「9」の倍数の「18」へ進み、さらに「9」の倍数の「27」……と進んでゆく。戦後地球へ最初に墜落した円盤を昇業者が調査したところ、内部の構造はすべてこの「9進法」にもとずいて建造されていたことが判明したとスカーリーの書物に述べてあるが、これは真実の記録である。

◎ その後宇宙人は、太陽系内に発生する自然の変位と核爆発の危険性を警告する方向にも努力を凝らした。根本的には彼らの存在を地球人に目覚めさせ、地球人と親しく交わることを目的としている。

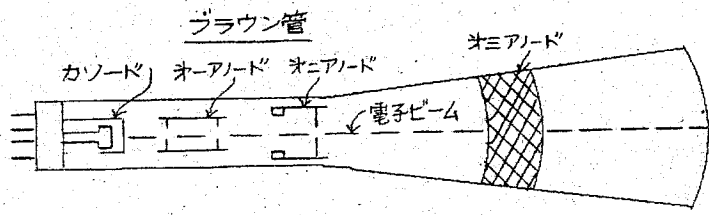
中一の太陽系内の宇宙活動

『オ三章 二の太陽系内の宇宙活動』

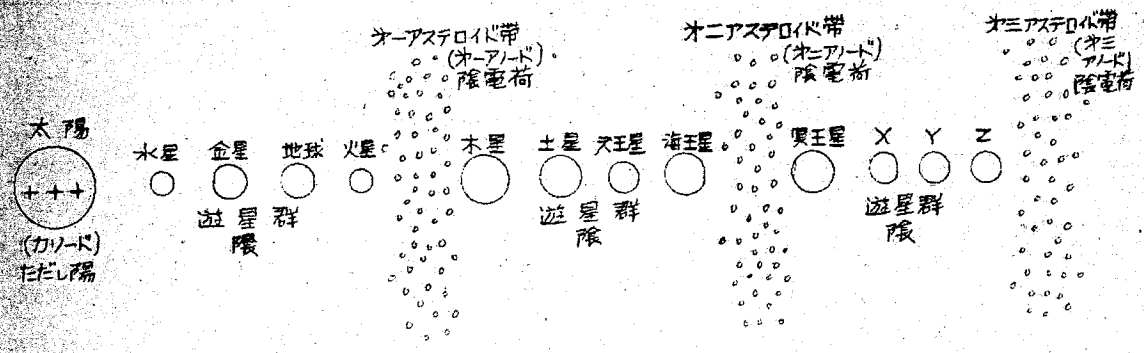
(註) この章ではきわめて興味深い理論が述べられています。すなわち地球よりも太陽から遠く遊星でなせ地球と同様の光と熱が得られるかという理由です。太陽の放射線はその距離の自乗に反比例して弱まってゆくといい厳然たる法則を如何ともしがたく、この美は私もかねてから疑問に思っていて、結局、遠方の遊星が地球と同様の光と熱を得るのは、遊星を包む大気層が一種のコンデンサー・レンズの役目を果たすのだろつと私なりに考えていました。これは当たっていました。(註)

◎ 右の理由は次の通りである。すなわち太陽系をテレビのブラウン管にたとえろとよい。カソードから出る電子をグリッドとアノードの高電圧が引き寄せ、すると電子は高速度でアノードに引っぱりられ、加速し

れた上で次のアノードへ直進する。かくて種々の異なるアノードと陽の高電圧を用いることにより、理論的には非常な遠方まで電子ビームを元のままのスピードで放射することが可能ということになる。太陽系ではオニアステロイド帯とオニアステロイド帯とが十二個の遊星を四個づつ三群にわけていて、この陰電荷を帯びたアステロイド帯がグリッドの役目をする。陽電荷を帯びた太陽の放射線は木星と木星間のオニアステロイド帯に吸引されて加速され、次の海王星と冥王星間のオニアステロイド帯へ送られ、ここでもまた加速されて終極元のままのスピードで最後の遊星にまで進行する。かくて、それ自体が陰である各遊星はこの陽の微粒子を空間から引き寄せ、これが電離層と大気圏の上層とで濃化されて、大気圏内の無数の微粒子がその濃縮された放射線に刺激を受けて可視光線を放つ。地面はこの線を吸収し、かわりに赤外エネルギーを放ち、このエネルギーが大気を活性化させて、それによって熱が放射されるのである。最後の遊星の外側にはオニアステロイド帯があって、これは他の太陽系とのバランスを保つ役目をしている。これらのアステロイド帯に属するものは、また新しい遊星を生み出す子宮のようなものである。吸引と反掩の法則のためにアステロイド帯中の微粒子同志のあいだに凝集の狀態が起って物質を形成する。つまり、一遊星が崩壊の過程に入る時、その遊星の磁氣的な作用によってアステロイド帯から物質が引き寄せられ、太陽系内の完全なバランスを保つ。そしてその古い遊星が崩壊するにつれて新しい遊星が自動的に作られるのである。(註。遊星の形成される過程についてはもっと詳細に述べてあります。二二ではほんの簡単な概略のために、おわかりにくいことと存じます) 右を回すものは次の通りである。



太陽系



「オ」五章 宇宙船と重力

(註) 三二では地球の磁場の状態から読みおこし、宇宙船の推進の原理のヒントを与えています。一字一句が重要な意味をもっていますので、概略ではとても意をつくらずにはできませんが、ザッと記すと次の通りです)

◎ 池の中へ二個の小石を同時に落すと二通りの丸い波紋が作られて、両方の波の先端が出会うところにて干涉模様が作られる。この干涉模様と云ふと楕円形となつて、小石の落ちた各地が楕円の長軸の両端に位置することになる。天体間の磁場にもこれと同じ關係が存在し、遊星間または遊星と太陽間にも磁場の干涉によって楕円磁場ができて、これが各天体間を結びつける強力なクサリの役目をするのである。

◎ 遊星間の磁気の川は、その流れが常に往復運動を起しているのので、宇宙船はその運動の比直を利用して一方へ進行する。往復運動の両直を同時に利用すれば船体は空間に停止する。宇宙船はロケットのような重力に抗う機械ではなくて、重力に従う原理にもとづいて作動する。すなわち船体内の発生器によって重力場を発生して、これが遊星の磁場と共振し、この共振重力場が船体を無重力にする。そして自然の力を利用するので光速以上のスピードで進行できるのである。宇宙船の推進力はファンダグラーフ静電起電機によって与えられる力に比較できる。空間浮揚の実験としては次のような方法がある。加減抵抗蓋でコントロールされた電磁石の直立した鉄心のまわりへアルミニウム輪を通すと、その輪は空間に停止する。しかし円盤はアルミニウム輪のように磁気の渦動によって浮き上るのではなく、それ自体の共振の場を生み出すのである。(註) 次に円盤の光る理由と消滅現象について述べてありますが、これはあくまでも物理的作用であつて、肉眼で

見た場合に一瞬消えたように見えるだけのこと、心靈や電磁的なるコングラトマンたちが云うような非物質化現象ではけつつけ加えてありません。)

「オ」四章 最近の科学の発達

(註) この章では主として米ソ兩國のロケット打上競争に言及し、ソ連の月着陸などの意義について述べ、科学者が月の裏側に植物が存在する事を見出したことが強調してあります。さらに科学者達が電磁波を見出した新事象を数多く紹介し、引力のコントロール機構は最終的には電磁的のものになる旨を述べ、この装置を研究している十四の会社が米國にあることを紹介し、いつか引力の秘密が完全に明らかにされたときはその解答があまりに簡單なので「小学生でさえも解せん」な簡單なことを思いつかなかつたのだろうか、と科学者は驚かして云つていいます。)

「オ」五章 二の太陽系内の変化

(註) この章の冒頭にきわめて興味深い一節がありますので、次に訳文をそのまゝ掲げることになります。)

「最近私は(註) アダムスキは) 数多くある円盤星群の一つである或る団体から送られた機関誌で、地球上に大変動が發生する旨の記事を読んだ。すなわち、この大変動が發生したときには宇宙機構が根本として、選ばれた少数の人々を地上から救出して連れ去るといふのである。これは全然根拠のない物語りだ。」

(しかし地球上に自然現象の変化が次第に増加する事象をアダムスキは肯定的に述べて、その理由を二、三次のようにあげています。)

◎ その理由の第一は、パロマー天文台のハロルド・ロバゴック博士が発見した太陽の磁極の逆転である。大変化が地球の磁場にも何

らかの影響を及ぼし、そのために地上に震災が増加することか考えられる。オニに、ロケトヤ人工衛星の打上げのために空周の種々の型が攪乱され、任力を交えたりして、それが原因で地上に手影響を及ぼす。つまり攪乱の余波が互便に変化を起すのである。最大の攪乱物は核爆発である。このために起る磁場内の変化は太陽の磁場の逆転によって生じる変化と結びついていて、これが長いあいだに種々の変動を生じさせている。

◎ しかし、我々は如何なる震災をも恐れてはならない。震災の発生によって人間を死ぬるのは神の罰ではなくて、全く本人がその時期にその場所にいたからにすぎない。これを選けるには科学者の警告に注意し、災害の発生を事前に感じ取る。直感力をもつようにし、自己の因果に起る。予感に注意をせらうべきである。オニミその他の動物はこの予感力を有して、早くから難をよけるのである。

『オニ六章 砂漠の足跡』

(註) この章はあの有名な一九五三年十一月二十日の「デザート・センチ」における最初の金星入との会見の際に残された足跡の模様や、写真裏の原板に現われた不思議な象形文字などについて解説したものです。

◎ この模様については世界中の多くの人が解説を試みたが、その殆どは心霊的な性質のもので、正確な意味とはかけ離れたものだと宇宙の兄弟は語った。ところがアダムスキに与えられたのと全く同じような象形文字の記された石を宇宙人から受けとったスペインがいる。またマルセル・F・ニホメットの「太陽の手」という書物に、アルジェンティンで発見された象形文字の写真を見せているが、これは砂漠に残されたのと同じもので、これによって火星間の交通と地球の古代文化とをつなぐ一連の事実が裏書きされた。アダムスキが象形文字を記された至る理由

の一つは、「地球人が故らかっていることを宇宙人が知っていた」という具体的な証拠を与えようとした。この象形文字を正しく解説した人がある。アフリカに住む「科学者」である。そして宇宙人から正しいと確認された。(註) 以下はこの部分の訳文です。「ネカに現われている各文字を、はめ紋の一駒として応用することによって彼は円盤の図形を作成することができた。また円盤の模様をなかにその文字を加えて大皿の模図を作り出したのである。この文字を研究したり、あれこれと配列をやり変えたりして、うちには、宇宙船で用いられる推進力とパワーがコントロールされる方法に關して彼は或るアイデアを思いついた。そこでそれを心算して実験してみたところ、驚くべき成功をおさめた。彼は、これによって「ヨレ地球の古代文明や哲学や他の遊星のそれと一致するものがある」と、そのことと模様の象形文字のなかに述べている。

『オニ七章 懐疑論者にたいする回答』

(註) ニニはアダムスキの実見記。以来の各体験記中、特に金星に人類が存在する可能性にたいして懐疑は激しく起ったけれども、最近では次に科学者によってその可能性が認められたことを述べ、科学者の各氏名とその声明内容を豊富に掲げています。また月に大気が存在する。またついでには、ソ連のロケットによって発見された月面の低エネルギーのイオン化ガスの層と高空の雲層の存在などが明らかにされた。ついでと例証しています。その他、ソ連のカザクスタン天体物理研究所が火星の軌道の外側を別の遊星が存在する事実を発見したこと。米国のスミソニアン研究所のバコス博士もそれを裏付けていること。ウィリアム・ミンソン博士がパロマーの二百インチで火星の植物を確認したこと。テアリズオーニア大学のヴェルズ・ウエップ教授が火星の運河は知的な生物によって作られたものだと証明したこと。その他多くの新発見例のもの

けて、地球の科学が初めて他の惑星に生物が存在する可能性を究める方向に進んでいることを強調してゐる。また従来の天文學者がかなり著した分光學と熱電計が他の遊星の研究には殆ど役に立たないことを人工衛星が實証した事實も付記してあります。すなわち、人工衛星に分光器を積込んで大気圏外から地球を観測させたところ、「この地球には人類の住めるような条件はない。水と酸素が存在しないからだ」といふ報告を米ソにも得たという事實は興味深いものがあります。電離層の電層が酸素と水のスペクトル光線を妨げたために記録されなかつたといふことです。またアダムスキがヴァン・アレン帯の存在を早くから同乗記の中に報告してしたことには特筆にあたります。」

『オ八章 デフにたいする回答』

(註。この章ではアダムスキの体験をワソだと非難するほどのデマをとりあげて、迷っている人々に正確な回答を与えようとしたものです。)

◎一九五八年に発生したキャンザス市事件について流されたテレビドラマのなかで、特に惑星団体の主宰者が流した情報は完全なデックアゲであった。(註。この氏名はあげておりませんが、どうやらNICADのキーホーを意味するようです)

◎私が(アダムスキか)パロマー・ガーテンズの飲食をまであるという説信完全を間違っている。あのカフェーはアリス・ウェルズ夫人の所有であり、私はただその世話をしていただけである。このカフェーはたの「飲食を」ところではなく、ホリディック誌に三度も紹介された有名な店である。また私がかつてハンバーグステーキの行商人としてあつて、三度或向盤乗降車の上で踊っていた人物であるといふ説も全くの誤りである。またかりにこの説が真実であつても、それは私の価値をいさゝかも傷つけるものではない。なぜなら、米國を名

三、四、五、六の物語を述べられているからである。

◎一九四四年に私は惑星の研究家にも編者としてそのなかにイエスキリストが宇宙船に乗って地球へ来るといふ記事を書いたことになっており、一九五三年にその記事を書きなおしてイエスの徳名を(金言ベローン)にとり変えたとその編者は、大めかしてゐるが、これは大ウソである。私はその頃そんな記事を書いたことはない。またイエスの徳名をそんなふうになんか軽く取扱うことは私にはできない。(註。その記事のデマをとりあげてその虚偽性を指摘してゐます)

『オ九章 私に宇宙人から何を学んだか』

(註。この章は最も真教が多くて、これはこの書の中の白眉といつても可い。またアダムスキは金星のことを最も早くからいふので、他の進化した遊星という場合はまことに金星に言及してゐる。)

◎現在世界にはかなり多くの宇宙人が地球人の間に混つてゐるが、地球人はこのことを知らぬ。宇宙人は各国民政府、公衆機関、軍隊などに入つて働いてゐるが、彼らは異常な能力、すなわちテレパシーを駆使して地球の人々を驚かせるのが普通である。しかしテレパシーや予感力を持つ人々をすべて宇宙人と断定するのはよくない。冷戦に於ける柄によつて判断すべきである。

◎地球人のなかには、この地球がイヤになつたので他の進化した遊星に逃げ去つてもらうことを望む人たちがいるが、この態度は間違つてゐる。我々はこの地球で生きてゐるためにこの地球に生きてゐるためであるから、自己の住む世界を聖域とみなして生活しなければならぬ。低級な人が急速に進化した世界(行く)とかえつて苦しむだけである。

◎地球の農業では最大限の収穫をたれようといふ會社のために、人工肥料などを用いて土地を肥使したが、それども、合意では人工肥料を

になりて、收穫がのつたらその何割かを土地に返してやり、輪作を勤行して土地に休息を与えてやる。かくして「取れざる種は健康を保つのに必要なまわめてくれた自然の要素をすべて含んでゐる」のである。我々は自然のものとへ帰つて因果關係を知るべきである。

◎地球は宇宙という学校なのかの一つの教室にすぎず、我々は二二で學ぶべき多くのことを持つてゐる。この課程を終了しないで一足飛びに他の進化した遊星へ進級することはできない。宇宙人が地球へ来るのは地球人が普通のな生命の諸法則を知るのを手伝うために来るのである。すぐれた教師は決して生徒をやりこめたりしない。生徒の精神状態を考へ方をよく見ながら、知的に未発達な若い人達を援助しようとする。

宇宙人もこれと同じ態度で奉仕してゐる。そして調和ある生き方を示すことによつて、同じようにやつてみようという頼みを地球人に起こさせることを望みながら地球人のあいだに混つて生活してゐるのである。

◎地球人の最も間違つた態度の一つは「好き嫌ひ」の心である。これを我々は克服しなければならぬ。また他人にたいして権力を誇る態度も全く間違つたことで、金星では万人が平等だとみなされてゐる。

◎金星では他人の行爲も想念にたいして一方的に指図することなく、創造者によつて与えられた各人の天賦の自由を認めてゐる。

◎宇宙人は地球人と同様、たれむれたり救つたりダンスをしたり、あらゆる種類のスポーツをやつたりする。しかし彼らは常にただやかて多くを語らない。これは、口で語るといつことには多くのエネルギーが費されるからである。地球人はあまりにしゃべりすぎて、時間とエネルギーを浪費してゐる。我々は自己の想念の所出と或る概念のとりこになる理由の方へ自分の心を向けるべきである。そして自力自身の概念の主人公にならねばならぬのである。

◎各遊星では遊星ごとに一種類の言語が用いられて、それが遊星ごとにそれぞれ異なるので、宇宙の兄弟たちは他の遊星の言語を學びどうやうに努力する。地球では多種類の言語がありすぎる。

◎宇宙の隣人たちは生きるための原則といたものを持つてゐる。これは土台となるべきもので、子供の生活をまずこれに基礎づけて、大人はこれから外れないように努力する。(註。以下の簡潔書は訳文のまま)
一、日常の健康と慰めにどつて実際に必要なものだけを望むこと。
二、偏愛することなく万人を平等とみなすこと。
三、自分の想念を觀察し、抑制して、それをいつも宇宙的な状態に保つてゐること。

四、万物が奉仕し合つてゐることにたいして感謝をすること。
◎金星の生活が地球のそれと異なる長は、彼らの親密さである。友人が友人であると考えられてゐるので、他人の家の水泳プールや芝生、花園などを楽しむのにいちいち招待を受ける必要はない。誰かがどの家へ行つても歓迎され、自由に楽しむことが出来る。

◎金星の建物には内部に磁氣的な吸引装置が仕掛けてあつて、舞り上る埃が下へ沈下しないうちに中央の容器にそれを引き寄せてしまふ。かくて空気の清浄法が地球よりもはるかに進歩してゐる。食物は急速に料理されてほとんど自然のままに食へられる。また衣服を水で洗濯したりしない。超音波利用による方法に似た処理法によつて衣服を清浄にする。つまり或るキャビネットのなかへ衣服を約三分間入れておけば全く新品同様になる。

◎彼ら金星人は自分の仕事を重く負担にしない。これは彼らの精神状態と想念の抑制力のためである。彼らは自分の仕事を「徹底的に楽しむために」やるのである。重要労働の時などは機械にやらせて、研究と生

酒のたのみに多くの時間を生かす。彼らもまた、山を歩いたり、川を泳いだりして生活の科学が教えられる。毎日に制限なしに誰かがそこでいつまでも夢を続けるのである。

◎ 聖書の「エデンの園」について宇宙の兄弟から聞いたところによると、これは（註。以下は原文のまま）「人間の理性が狂って、我々が『靈魂』と名付けている、人間の永遠に生きる部分に関する知識を人間が忘れるときにあつた最微的な物語りなのである。創造的な力と知性との一單位である宇宙的な人間すなわち『靈魂』が肉体を建設し、それを生長させて、表現してゐるのである。ゆえに人間が自分のこの永遠なる部分を意識してゐる限り決して老いることはないし、如何なる蒙昧も過勞をも感じないのである」

◎ アダムとイヴの物語は人類の歴史を描いた寓話である。人間が自己の責任を自覚してゐるならばその運命は幸福であるが、個人的な感情に支配されるならば「エデンの園」から自決によって作りあげられる苦難の世界へと連れて行かれるのである。

◎ 金星には地球にちよるような教会などは存在しない。彼らの生活そのものがいわば宗教ともいへべきものとなつてゐる。彼らの生活態度と宇宙の諸原則とをもつてすれば、宗教的な教えと日常生活との區別はない。

◎ 金星では命令の如何にかかわらず遊星上を定期的に旅行したり、巨大な豪華船で宇宙の他の場所を訪れたりする。（註。旅行の重要性を強調してゐます。以下は原文のまま）「記録類や小型の複製物などによつて多くを学ぶことはできませんけれども、旅行することは済むことのない實際的な教育の源泉であつて、それが筆とみだけてなく決して忘れることのできない永遠の価値をもつた教訓を与えることを宇宙人は知つてゐる」のである。

◎ 遊星上を遊星間を飛行するの理由が、感情が肉体に及び影響がより理解されて、抑制され、肉体に緊張を起さず、肉体はかりでなく心にまで休息を与えるからである。地球人はこの完全な休息である。我々もつと余暇をもちつうにして肉体に弛緩（ラクゼーション）を与えよう。我々の池邊の状態は楽しみのなかに見出される。楽しい概念は強力であつて、楽しむこと人間を解放するのである。心を緊張させると感受性はたかまらぬ。また宇宙人が健康を保つ別な重要な要素は、肉体を柔軟に保つための一定の運動を行なうことである。肉体を心からいたわつて、決して緊張させないのである。

◎ 彼ら宇宙人は如何なる人間の集りのなかへ入つても祝福の心をもたないで座することはできないといふ意識的な知覚力をもつてゐる。他人を罪人と見ないで、生きた状態にある神の英知（ウィズダム）を見る。

◎ 金星人は個人の生涯で数百年を生きて、いずれは死ぬけれども、死という現象を悲しむことはなく、むしろ生まれかわつてまた新たな体験の機会をもつことを喜ぶ。別離による苦痛はない。彼らに理解されてゐるような真実の愛は如何なる種類の別離をも知らぬからである。

◎ 生長と進化は個人的な問題である。道は示されるが、各人が自分てそれを旅しなければならぬ。他人が自分にかつてゐることはできない。全く自分の態度一つである。

◎ 火星は科学と工業が高度に進歩してゐる。しかし金星と同様にそこにも未得はない。火星は太陽系内のバランスをとるための秤（はかり）として役立っており、土星人は遊びと休息と仕事あいだのバランスをうまくとつてゐる。我々がこれら遊星人の如くに生きるならば、太陽系内の家族の仲間入りができるのである。

以上でオ一部才九章までの概略を終ります。しかしこの種の書物は一言一句に重要な意義が含まれていりますので、大體概要だけを内容を把握することは無理です。このカリ版二ニースレーターは著書の追索性の百分の一をもあらわしてはいませんから、そのつもりでお考え下さい。

さて最初に申しました通り、私は去る十一月十七日に京都でアダムスキの親友であるバンスン氏夫妻に会って、夕食を共にしながら約四時間を終始アダムスキ問題について語り合いましたので、二二にその会話のなかで重要な部分を要約して掲げましょう。

バンスン氏は米國の或る大会社の社長で四十才の少壮實業家です。ノースキャロライナ州立大学で英文学を學んだのち製菓の会社を継いだとのことで、教カ國を歴訪したついでに日本に立寄られた次男です。非常に豪放磊落で実に愉快な人物であり、夫人は氣立てのやさしい方で、二人ともきわめて親切な人だという印象が強く残りました。バンスン氏夫妻に会ったことは私にとって重なる意義をもつもので、私はこれによって二下の研究に一段と強い自信と勇氣を与えられたことを付記しておきますよう。

久 私はアダムスキを今世紀最大の人物であると考えている。あなたは どう思っているか。

バ 私も同感である。私自身は田盤を見たこともないし、また自警體験の如何をあまり問題にしていない。私が彼を尊敬するのは彼の洞察カと實業家である。彼は聖人ではない。人間だ。しかし偉大な導師であり、また実に賢明な人である。古く偉人というものは他人の思想を燒き直すのではなく、全く新しい概念をもたらしめるものだ。イエスキ

はながそうであつた。アダムスキも亦通りで、彼の空想哲學は偉大な知恵を獲得したものである。

久 米國人一般はアダムスキをどのように考えているか。

バ 米國人は一般に田盤についてあまり興味をもたないので、アダムスキをよよく知らない。

久 彼は ^{シロ} 教授と自称しているといわれるが、二の長は？

バ 彼は絶対にプロフェッサーと自称したことはない。ただ彼を敬慕する人たちがプロフェッサーの称号をつけて呼んでいるだけのことだ。それが自称したかの如く誤まり伝えられたのであつた。私自身も彼をプロフェッサー・アダムスキと呼んでいる。しかし彼は非常な賢者なので、プロフェッサーと呼ばただけではとても物足りないほどだ。久 ウィリアムソンをどう思うか。

バ 彼のことはよく知らない。しかし例の六人の目撃者についてはあまり氣にしないほうがよい。問題は物的証拠や目撃証人などではなくて個人の直感力である。私自身の感で彼を偉大だと思うのだ。

久 キーホー少佐をどう思うか。

バ キーホーは必ずしもわるい人間ではないが、ただ二二の二二ろが)と云つて頭を指しながら)制限されていて狭いのだ。

久 ルーシーはなぜ別れたか。

バ それは知らない。しかし彼女も立派な婦人だった。

久 向イクラいか。

バ 五十四、五才くらいだ。

久 日本の自警唯一コンタクトマン松村維亮の體験をどう考へるか。

(二二)をその體験からアダムスキにたいする攻撃などについて詳細を語る)

ハ、そのものは忘れぬ。

久 旅行の途中、他の国のG・A・P協力者に会ったか。

バ インドでマイトラ博士に会った。彼は七十才の哲学者だ。

久 あなたはアダムスキを精神的に援助しているか。

バ ヒキどきしている。

久 クリシユナムルラーを知っているか。

バ 知らない。帰ったら研究してみよう。

久 アダムスキの何を偉大だと思つたか。

バ 彼の体貌の描写の写実性だ。しかも霊界通信とハッキリ区別している。そして甚だ偉大な勇氣をもっていることだ。

久 ケネデー大統領はアダムスキのことを知っているか。

バ それは知らない。しかし米国の政府高官、政治家、科学者などでアダムスキを支持する人がかなりいることは確かだが、米国の社会ではそのことを公然と言明することはできない。これは各国ともおそろしく同様だろう。

その他多くを語り合つて非常に楽しい夕べをすごした次第です。彼の英論は相当な早口であり、しかも発音が少々不明瞭なドラ音であるために、私はたまたま聞き返さねばなりませんでした。彼は日本女性の優越さを讃え、給仕の女性をしまりにシキ耐強いグとほめては感心し、また日本婦人の肌の滑らかさがとても気に入ったようでした。日本の風景特に京都の素晴らしさを強調していました。右の会話からわかりますように、私の対アダムスキ親とバンスン氏のそれとはほとんど同じであつたわけですね。バンスン氏の十八才になるお嬢さんは名門校として名高いスミス・カレッジに在学中で、飛行機の操縦が得意せとのことですね。

X

X

◎ 最近CBAの機関誌中にアダムスキがフロベッサールを自決しているところを、その証拠と称して彼が撮影した田舎屋敷の下に、*of Adams's*と記入してある姿を指差してありますが、アダムスキの自筆署名を印刷している私には、これが全く他人の書いたものであることがわかりますので、二に訂正しておきますよう。かつて世話になった恩人たちの決意と攻撃とは全くいさな名告を平気で出すような連中が、フロベッサールとどこか宇宙のパイオニアと自決している。ほうがよほどコッケイです。聞くと二にようになりますと、一部の幹部が全く横暴をきわめていて、会員からまき上げた怒りな金で乱費の限りを尽くしてきたようですが、周囲の窮乏をたくみにつかまれて被害をこうむった方が泣き入りになってしまったことは実に気の毒です。京都の某氏などはCBAのために家財をすっかり失ひ、現在は洋服の繕いなどをしてやうと糊口をしのいでおられるというのを聞いて何とも云えぬ気持ちになつてしましました。一体何者にたぶらかされておられるのか知りませんが、未だに金集めに奔走しているというこの狂いに狂った集団こそ、まさにブラックの手先でなくて何でしょう。感情を抑制することを知らず、激痛のおもむくままにかつての恩人たちを尊倒するこの暴れ馬のようは、妖氣に満ちた団体が地球人の代表として選ばれた選民であるとは、自然のバランスを完全に失つてしまったこのようには存在は、いつかは同じ自然の手によって交還せしめられ、修正されるべきが来るでしょう。

昭和三十三年十一月二十七日

久保田 八郎